

楚辞における気象観*

田村 専之助**

まえがき

一般に中国の知識人の記述のしかたは哲学的記述、科学的記述と文学的記述との間に明確な区別はなく、そのいずれに於いても創作、創案と他人の書物から得た知識との間の区別も不明確であり、更に経験的事実と想像との境界も曖昧であるのが一つの特色である。また哲学的、科学的な考え方、記述の進め方においても、一つの事項から次の事項への展開は厳密な論理によらず、観念連合、修辞などによる場合が多いことも忘れてはならない。楚辞は大学であり、一種の哲学であるともいっているので、上にのべたことを頭において、そこにあらわれる自然観の側面を追永し、中国気象学史研究の中の一つとして気象観をさぐってみる。屈原(B.C. 3—4)の作ということになっている部分だけを問題にするが、厳密にいへば“離騷”さえもはたして事実屈原の作品であるかどうかは研究を要する問題なのである、“遠遊”などは漢時代(B.C. 1)の作とみるべきふしがある、とされている¹⁾。

宇宙観

まず宇宙観の側面をみると

曰遂古之初，誰傳道之，上下未形何由考之。(天問)
すなわち、“曰く遂古の初は誰か之を傳へ道ふ，上下未だ形れず何に由りて之を考えん。”という美しい文字があるが、宇宙のはじめを説いたこういう思想は老子(二十五章)、莊子(卷二大宗師第六)、列子(卷一天瑞第一)及び淮南子(精神訓、覽冥訓、天文訓)などにもみえるが、かような思想は中国の道家にかぎったものではなく、世界性のあるものである。つぎに九歌の少司命に“九天”があり、また

九天之際，安放安屬，隅隈多有誰知其數。(天問)
すなわち“九天之際，安くにかかり安くにか属く，隅隈多く有り，誰か其數を知らんや。”とあり、ここにも九天という思想があり、漢書の郊祀志にもそれがみられ

るが、これが、呂氏春秋有始覽、淮南子の天文訓などにみられる九野すなわち天を平面的に中央と八方とに分けた思想と同じかどうか問題である。というのは、少し前に
圓則九重。孰營度之。惟茲何功。孰初作之。(天問)
すなわち“圓にして九重なるは、孰か之を營度する、惟れ茲れ何の功ある、孰か初めて之を作れる。”とあり、圓は呂氏春秋・季春紀第三に“天道圓。地道方。”とある圓と同じ文学、同じ思想であって天は九重である、とするもので同じ思想が淮南子の天文訓にもみえる²⁾。この方は立体的な九層の天ということで、先の平面観とは相違するが、上記の“天問”では立体観を通してのりかどうか、問題である。いつれにしても、上代中国には天の構造を平面、立体の二様考える方法があり、ここでそのことに関する疑問がおこさるべきことに注意を要する。つぎに

東西南北。其脩孰多。南北順嶺。其衍幾何。(天問)
すなわち“東西南北、其の脩さ孰れか多き、南北嶺に順ふ、其の衍幾何ぞ。とあるが、これは当時編曆天文学の知識が既に相当高度に進んでいたもので、それがここに顔を出したものであって管子(卷二三、地數)、周髀算經(卷上)、淮南子(天文訓)、呂氏春秋・有始覽・有始河図括地象(博物志所引)などには具体的な数字がみえている、つぎに

幹維焉加。天極焉加。八柱何當。東南何虧。(天問)
すなわち“幹維焉にか繋り、天極焉にか加はる、八柱何れにか当り、東南何ぞ虧けたる。”とあり、地は八柱によってささえられている、というのはともかく、はじめの二行は天は廻転するというを車軸うけの機構によって表現したものであるが、これも礼記の楽記に、“著不息者天也。著不動者地也。”とあり淮南子の厚勳訓に“是故能天運。地滯。”とあり後漢の張衡の靈憲に“天体於陽。故圓以動。地體於陰。故平以靜。”とあるのと同じ中国上代天文学上の一表現である。また

出自湯谷。次于蒙汜。自明及晦。所行幾里。(天問)
すなわち“湯谷より出で、蒙汜に次る、明より晦に及ぶまで、行く所幾里ぞ。”とあるが、これは太陽の行程をのべたもので、湯谷は暘谷と同じで書經の堦典以来著

* Meteorological Opinions in Soji

** Sennosuke Tamura, 静岡県沼津工業高校, 1960年7月1日受理—

名である。これについて

夜光何徳。死則又育。厥利維何。而顧菟在腹。（天間）

すなわち“夜光何の徳ありて、死して則ち又育する、厥の利維れ何ぞ、而ち顧菟と腹に在る。”とあり、ここで晦、朔を死、生としているがこれも単なる文学的表現とは考えられず、根柢に観測天文学的見解があるものと私には断ぜられる。周の彝器、漢書律歴志に引かれた周書武成、偽古文武成・畢命、逸周書の世俘解、今文の康誥・顧命、漢書の王莽伝などに太陰について生羈、死羈・生魂、死魂という語のあることを回想するがよい。また太陰に兎がいるという伝説がとり入れられているが、もしこれが印度起原とすれば、おもしろいが慎重な研究を要する。つぎに太陽と太陰の交会について

天何所沓，十二焉分。日月安属，列星安讞。（天間）

すなわち“天何れにか沓ふ所ぞ、十二焉に分てる、日月安にか属する、列星安にか讞れる。”とあるが、ここにいう十二は十二辰の事であって、太陽が太陰と十二回交会して天の黄道を一週することをいったもので、星座の二十八宿が十二辰に区分されている。これはあくまでも、太陰太陽暦の成果の基礎の上に立った詩的構造である。また

寧彗星目為旋兮。舉斗柄以為麾。叛陸離其上下兮遊驚霧之流波。（遠遊）

すなわち“彗星を寧り目て旋となし、斗柄を挙げ以て麾と為す、判と陸離として其れ上下す、驚霧の流波に遊ぶ。”というので自由奔放にして構想雄大であり、彗星と北斗七星の芸術化である。

つぎに生命観としては九章の涉江に

乱曰。鸞鳥鳳皇，日以遠兮。燕雀烏鵲，巢堂壇兮。（涉江）

すなわち“乱に曰。鸞鳥鳳皇，日に以て遠ざかり、燕雀烏鵲，堂壇に巢ふ。”というのであるが、ここにみえる乱というのは樂の最後につける乱辞のことであるが、鸞鳥と鳳皇とは聖天子がでると現われる、とされている観念の上だけのものであって、実在の鳥ではなく、鳥と鵲が、わる者の表徴物とされている。また

后皇嘉樹。橘徕服兮。受命不遷。生南国兮。（九章橘頌）

すなわち“吊皇の嘉樹，橘徕り服す，命を受けて遷らず，南国に生ず。”というので江南のタチバナ，江北に植えればカラタチとなる。という有名な言葉によったもので，南方暖地のタチバナも，北方の寒冷地にうつせば，

結実しなくなる，というほどの意味かと思われるが，これは列子の湯問，晏子春秋の雑下，説苑の奉使，爾雅，周礼の冬官考工記などにもみえる有名な言葉である，

技術観においては“繩墨に循ひて頗かず。”（離騷）とか“方を測って圓と為す，常度未だ替らず。”（九章，懷沙）とあるが，圓は円であって，器具と技術における法則性とが非常に強くいわれている，同じく九章の涉江に“九たび臂を折りて醫と成る。”と，医術を修得するためには非常な苦しみをなめなければならない，という当時の俗言を引いているのも，ともかくも技術尊重の一側面とみなくてはならない。

気象観

天文に

“何の所か冬暖なる，何所か夏寒き。”とあるのは，冬は寒く夏は暑いのが普通であるが，その反対の国はどこか，という意味であろうし，九章の哀郢編に“仲春に方って東に遷る。”とある“仲春”に注意を要するが，編曆天文学の知識が確立して以来，一年の長さを種々に区分する方法が行われ，次第に複雑になっていったが，ここの仲春は四季の各季を孟，仲，季の三季に分けるもので，呂氏春秋の十二月紀にその典型がみられる，また問題のある遠遊篇ではあるが“六氣を養い沉瀝を飲み”とみえるが“六氣”は左伝の昭公元年の条にもみえ陰，陽，風，雨，晦，明であるとされているが，もとよりまったく観念的なものである。つぎに太陽を題材にした九歌の“東君”では長々と美辞がさざげられている，また“遠遊”には

朝濯髮於湯谷兮。夕晞余目兮九陽。吸飛泉之微液兮懷琬琰之華英。

すなわち“朝には髪を湯谷に濯ひ，夕には余が目を九陽に晞にす，飛泉の微液を吸ひ琬琰の華英を懐く。”とあり，天間に“羿は焉くに日を彈たる鳥は焉く羽を解せる。”とある太陽の話は莊子の卷一齊物論第二に“昔者十日並出，萬物皆照。”とはげしい日照の観念化が十個の太陽が出たとして表わす思想が見えるが，これはさらに淮南子の本經訓などみえる堯の時十個の太陽が出て草木がこげてしまったので堯は羿に命じて，この十日を射らしめた，これが九個の太陽にあたって落ち，一個だけのこったとする説話に展開した。ここにみえる“九陽”は上記の九日とも関連があるが，湯谷の上に扶木あり，九日下枝に居り，一日は上枝に居るという山海經（海外東經）にある説話とも密接な関係のある九日である³⁾。

また

日安不到。燭龍何照。羲和之未揚。若華何光。(天問)
すなわち日安くにか到らざらん、燭竜何ぞ照せる、羲和の未だ揚らざるに、若華何ぞ光れる。とあるが、若華とは若木の花のことであるが、燭竜及びこの話は淮南子(墜型訓)、山海経(海外北経、大荒北経、海内経)にもみえ、古い民族的伝承であるらしく、楚辞ではそれが美しく芸術化されている⁴⁾。

つぎは風である。まず“遠遊には”長く風に郷ひて情を舒ぶ。”と咏歎の情が風に托してのべられてい、九歌の“山鬼”では東風が颯々として、“遠遊”には南風といわれる凱風があり、迅風もある。そのほか九歌の“河伯”には暴風であるといわれる衝風がある。由来春の風や秋の風は詩情をそそるものであり、“秋風の動容を悲しむ、何ぞ同極の浮浮たる。”(九章・抽志)、“帝子北渚に降る目。眇眇として予を愁へしむ、翩翩たる秋風、洞庭波ちて木葉下る。”(九歌・湘夫人)、“風颯颯として木蕭蕭。公子を思いて徒憂に離るのみ。”(同・山鬼)と、さびしく、ものがなしい秋風をうたいこんだ千古の名文がある。また九章の“涉江”には“歎、秋冬の緒風。”があり、九歌の“少司命”、九章の“悲回風”には回風があり、離騷、九歌の“大司命”には颯風がある。もとより“離騷”、“遠遊”の風伯、悲廉は風の神である。そうして“遠遊”に“風穴に依て以て自ら息ひ、忽ち傾寤して以て嬋媛たり。”とある風穴というのは、崑崙山にある風のでてくる穴とされているものであり、民間説話にちがいない。

雲については“雲旗の委蛇たるを載つ。”(離騷)、“回風に乗り雲旗を載つ”(九歌・小司命)、“雲旗の委蛇たるを載つ”(九歌・東君)、“雲旗の逶蛇たるを載つ。”(遠遊)などにおける雲旗は雲型を用いた着想であり、“青雲の衣、白霓の裳。”(九歌・東君)、“青雲を涉り以て氾濫として遊び。”(遠遊)では彩雲が芸術的表現の素材としてもちいられ、天問の“白蜺弗を製らし。”では弗、すなわち細長い白雲が用いられている。また“言を浮雲に寄せんと願へども。”(九章・思美人)、“浮雲に掩はれて上り征く。”(遠遊)では浮雲の活動面が駆使されたものと思われる、つぎに雲の神の祭について、

浴蘭湯兮沐芳。華采衣兮若英。靈連蜷兮既留。爛昭昭兮未央。(九歌・雲中君)

すなわち“蘭湯に浴して芳沐す、華采の衣は英の若し、靈、連蜷として既に留まり、爛、昭昭として未だ央きず。”とまつられる雲の神としての抽象的な名称“雲

中君”がうたわれてい、“靈、皇皇として既に降り、焱として遠く雲中に擧る。”とも記されている。さらに雲の神は固有名詞としては“豊隆”とよばれ吾れ豊隆をして雲に樂り虞妃の在る所を求めしむ。”(離騷)、“言を浮雲に寄せんと願へども、豊隆に遇ふて將られず”(九章、思美人)などとみえている。また“遠遊”がもし後人の作であるとすれば“豊隆を召して先導せしめ、太微の居る所を問ふ。”というのは上記にみえるようなものを、まねたということになる。雨を降らす雲の機能は、あまり活用されていず“炎気の相仍るを觀、煙液の積る所を窺ふ。”(九章、悲回風)の煙液がわずかに雲と雨らしいのに過ぎない。

雨においては“萍翹起雨。”(天問)とある萍翹は屏翳ともいわれ雨の神であるという⁵⁾。すなわち“東風颯り神靈雨ふらす。”(九歌・山鬼)の神靈であろう。降り方の詩的表現には“風颯颯”に対して“雨冥冥”(九歌山鬼)があり、暴雨であるといわれている“凍雨”もあり、有名な禹と洪水の伝説も“洪泉極めて深し、何を以て之を賃げる、地方九則あり、何を以て之に墳せる。”(天問)と取りいれられている。

つぎに気温と水蒸気については、九章の悲回風に“凝霜”があり遠遊には“徵霜”がある。雪はわずかに“霜雪”という熟語がみえるに過ぎず(九章・悲回風)霰は“涕瀼瀼として其れ霰の若し”(九章・哀郢)と涙のおちる様子の形容としてみえ、露も深い露といわれる“湛露”(九章・悲回風)がみられる。雷はまず雷鳴が九歌の山鬼に“靄填填”とみえ⁶⁾、離騷では“雷師”が望舒(月神)、飛廉(風神)と共に使役されている。霧はわずかに“崑崙に馮り以て霧を激し”(九章・悲回風)とあるにすぎない。最後に気象学的気象については遠遊に漱正陽。而含朝霞。

すなわち“正陽に漱いで朝霞を含む”とあり、“菅魄を載せて登霞し、浮雲に掩はれて上り征く”とあるが“霞”は日本などで春季に山のふもとなどに柵引くカスミすなわち“ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも”(万葉集十)といわれる帯状に柵引く水蒸気ではなく⁷⁾、水蒸気を含んだ空気の厚い層に太陽の光線が屈折して紅色にみえる現象すなわち“ヤケ”のことであって東雅(新井白石)巻一。天文の条に霞について、“今俗にアサヤケ・ユウヤケなどもいうなり。”とあるのは中国における“霞”の解釈としてのみ正しく⁸⁾、これでは上記の日本における気象学的現象としての万葉のカスミの解釈にはならない。虹については九章

の悲回風及び遠遊に“雌蜺”^{しげい}があり、遠遊には別に“雄虹の采旄を建て、五色雜へて炫耀たり。”とあって、ここに虹の雌雄がみられることには注意を要し、B.C.一世紀の蔡邕の月令章句にもこの思想があらわれている。上記の遠遊においては虹は五色のものとされているが、なるほど三皇五帝といわれるように五は中国人のこのみの数であり五色という言葉も、使いならされているが、虹が七色である事実を知っていたものの筆としてはおかし。すなわち雪の六方晶はすでに知っていた中国人⁹⁾も虹が七色であることは、当時まだ知られていなかった、と考えられる。虹については古来世界の各民俗の間に多くの俗信があるが、中国における伝承も注意すべきである。

む す び

中国では、一概にいえば、古今を通じてすべての知識人は天文学者であり、政治家でもあり、詩人でもあり、官吏でもあった。楚辞の作者とされている屈原としても、本来同じことである。したがって、そこに宇宙観や編暦天文学の知識が豊富に背後にみえても不思議はない。ただし、気象現象は数量的、論理的にとらえがたいもの、すなわち、天文学が固体運動だけをとればよいのに対して、気象現象には固体運動あり、液体の問題あり気体もあり、これらの混合の場合もあって、それらが熱力学的に処理されなければならない難問題であるので、科学的な体系をもつことは容易ではなかった。こうみえてくると、楚辞の気象学的認識がするどくなくても、あまり強くは責められず、むしろ気象現象を芸術化し、高くうたいあげている点を賞讃すべきものと考えられる。

註

- 1 津田左右吉・道家の思想とその展開 pp. 653-655.
- 2 天問に“地方九則”と天の図に対する地の方があがる。
- 3 呂氏春秋、卷二十二慎行論・求人に“九陽之山”がみえ、審分寛の知度にも“化九陽奇眩之所際。”とみえる。また左伝の昭公七年には“天有十日”とあるがこの十日は、十千の十日であって、十個の太陽ではない。私は二日出ず、三日出ず、とかいわれているのは、気象学的光象のモック・サンの観察が根柢にあるものであり、十日出ず、というは烈しい日照の観念化と考える。
- 4 日御としての羲和に対して、離騷に望舒^{ぼうじよ}という月御の名がみえるが、この方は羲和ほど有名ではない。いずれにしても日御、月御を駆使しているのは雄大である。
- 5 遠遊には“聞く赤松の清塵を”と赤松という名称がみえるが、史記の留侯世家にも赤松子があり、註によれば神農の時の雨師とされているのであって、列仙伝にもみえている。そのほか同じ篇には、雷公とともに単に雨師といういいかたもある。
- 6 “卜居”には“瓦釜は雷鳴す”と大きなひびき、のたとえとして、用いられている。
- 7 万葉集卷十(1940)に“朝霞なびく野辺にあしびきの、山ほととぎすいつか来鳴かむ”とあり、1941、1945にも朝霞という言葉があるが、これらも、いうまでもなく中国の朝霞のすなわち“アサヤケ”ではなく日本のたなびく“カスミ”である。
- 8 東雅は享保元年(1716)にできたものであるが、名称も日本の爾雅という意味であるように、中国中心であるが霞をいきなり“カスミ”とせず“ヤケ”としている点はかえっておもしろい。
- 9 拙著“東洋人の科学と技術”(pp. 215-221)

気象の英語 (30)

(235頁からつづく)

(4) certainly など

可能性を表わす副詞はたくさんあるが、その主なものを可能性の大きいものから挙げると

certainly, surely, perhaps, possibly, probably,
likely, scarcely, never

certainly は“疑いない”ことを表わし、surely は“恐れがない”、“危険性がない”ことを意味する。Perhaps, probably, likely は大体同じで“多分”、“おそらく”という意味である。Possiblyについては前にやや詳しく述べた(25. p.180). likely は副詞としてより

1960年8月

形容詞として使う方が多い。

(5) probable と likely

述語として使う場合、likelyの方は人称構文“be likely to 動詞”でも非人称構文でも使われるが、probableの方は非人称構文、すなわち、it is probable that ~の形でしか使われない。

(6) promise と threaten

「～しそうだ」という時、望ましいことには、promiseを望ましくないことにはthreatenを使う。

It promises to clear up.=晴れそうだ。

It threatens to rain=降りそうだ。(早ばつの時なら promises)

(次号につづく)